

小学校の外国語科に対する大学生と若手教員の意識

— 小学校総合選修の在校生と卒業生を比較して —

佐伯 英人・中田 青空*

The Consciousness of University Students and Newly-qualified Teachers toward Foreign Language at Elementary School

— A Comparison between Current Undergraduates and Recent Graduates of the Elementary School Education Course at Yamaguchi University —

SAIKI Hideto, NAKADA Aozora*

(Received September 24, 2021)

1 研究の目的

2017年3月告示の『小学校学習指導要領（平成29年告示）』において「第4章 外国語活動」（p.173-178）が示され、中学年（第3学年及び第4学年）に外国語活動が導入された。また、「第2章 各教科」の「第10節 外国語」（p.156-164）が示され、高学年（第5学年及び第6学年）に外国語科が導入された（文部科学省，2018）。この中学年の外国語活動、また、高学年の外国語科は、2018年、2019年の移行期を経て、2020年4月から全面実施されている。

佐伯・中田（2022）では、中学年の外国語活動に対する教育学部の学部学生（3年生と4年生）及び小学校の若手教員（1年目と2年目の教員）の現時点（2020年12月）の意識について調査した。質問紙では、質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」と質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をしたい。」を設定し、選択技法による調査、記述法による調査を実施した。

選択技法による調査を分析した結果、以下のことが明らかになった。

質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」について、学部学生と若手教員の意識は「良好」でもなく、「不良」でもなかった。両者を比較したところ、意識に明瞭な得点差がみられなかった。

質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をしたい。」について、学部学生と若手教員の意識は「良好」でもなく、「不良」でもなかった。両者を比較したところ、明瞭な得点差がみられ、学部学生の意識が、若手教

員の意識よりも高かった。

記述法による調査を分析した結果、以下のことが明らかになった。

質問項目①「小学校中学年の外国語活動は必要である。」について、学部学生と若手教員で、意識の要因の有無の表出の仕方を比較したところ、ポジティブな意識の要因の有無の表出の仕方は9つの要因のうち、すべてで一致していた。一方、ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因のうち、2つの要因で一致していたが、1つの要因で一致していなかった。

質問項目②「小学校中学年の外国語活動の授業をしたい。」について、学部学生と若手教員で、意識の要因の有無の表出の仕方を比較したところ、ポジティブな意識の要因の有無の表出の仕方は9つの要因のうち、7つの要因で一致していたが、2つの要因で一致していなかった。一方、ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因のうち、1つの要因で一致していたが、2つの要因で一致していなかった。

本研究では、高学年の外国語科に対する教育学部の学部学生（3年生と4年生）及び小学校の若手教員（1年目と2年目の教員）の現時点（2020年12月）の意識を調査し、両者を比較した。本研究の目的は、外国語科に対する学部学生及び若手教員の意識を明らかにすることである。

2 調査の対象と調査の方法

調査協力者は、佐伯・中田（2022）と同じである。具体的にいうと、山口大学教育学部小学校教育コースの

* 防府市立玉祖小学校

小学校総合選修に所属している学部学生（3年生と4年生）及び山口大学教育学部小学校教育コースの小学校総合選修を卒業し、公立小学校で教諭として勤務している若手教員（1年目と2年目の教員）である。

3年生の学部学生の調査は、主免許である小学校の基本実習が終了した後の2020年12月に実施した。その他、4年生と若手教員の調査も同月（2020年12月）に実施した。

調査方法には質問紙法を用いた。調査方法としては、調査協力者に、紙媒体の用紙で回答する方法とWebアンケートで回答する方法があることを知らせ、いずれかの方法を選択させた。なお、紙媒体の用紙による調査とWebアンケートによる調査の内容は同じである。

質問紙では「問い」を設定し、「各質問項目において、当てはまる番号に○をつけてください。また、そう思う理由について教えてください。」という教示を行い、選択技法と記述法で回答を求めた。選択技法による調査では、2つの質問項目（質問項目Ⅰ「小学校高学年の外国語科は必要である。」、質問項目Ⅱ「小学校高学年の外国語科の授業をしたい。」）を設定し、5件法（5：とても当てはまる、4：だいたい当てはまる、3：どちらとも言えない、2：あまり当てはまらない、1：まったく当てはまらない）で回答を求めた。また、記述法による調査では、「その理由」について質問項目ごとに記述欄を設定し、自由記述で回答を求めた。この他、性別を男性、女性で示し、選択するように設定した。

3 分析の方法

回答者数は65名であった。その内訳は、学部学生（3年生：15名、4年生：23名）が38名、若手教員（1年目：19名、2年目：8名）が27名であった。

分析するにあたり、学部学生と若手教員、男性と女性の2変量でFisherの直接確率検定を行った。なお、若手教員の1名が性別について未回答であったため、学部学生38名（3年生：15名、4年生：23名）、若手教員26名（1年目：18名、2年目：8名）を対象として分析した。分析の結果、学部学生と若手教員、男性と女性の人数に有意な関連はみられなかった（表1）。このことは、学部学生と若手教員、男性と女性の人数に偏りがみられなかったことを示している。

そこで、本研究において、性別については考慮せず、学部学生（38名）と若手教員（26名）という2つの集団を視点として分析し、議論することにした。

表1 Fisherの直接確率検定の結果

	男性	女性	p値	有意確率
学部学生	10	28	1.00	n. s.
若手教員	7	19		

数値：人数

n. s.：非有意

選択技法による調査の回答については「5：とても当てはまる」を5点、「4：だいたい当てはまる」を4点、「3：どちらともいえない」を3点、「2：あまり当てはまらない」を2点、「1：まったく当てはまらない」を1点として、質問項目ごとに学部学生と若手教員の平均値、標準偏差を算出し、天井効果と床効果の有無について検討した。さらに、対応のない検定を実施した。

質問項目Ⅰと質問項目Ⅱは、得点の値が高いほど調査協力者の意識が良好であることを示している。そのため、天井効果がみられた場合、意識は「良好」と判断し、床効果がみられた場合、意識は「不良」と判断した。

記述法による調査の回答については、記述を読み、その理由が書かれているもの（調査協力者の意識の要因を見取ることができたもの、もしくは、意識の要因を類推できるもの）を抽出した。この時、選択技法による調査をもとに「5：とても当てはまる」と「4：だいたい当てはまる」を「ポジティブな意識」とし、「3：どちらとも言えない」は「ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識」とし、「2：あまり当てはまらない」と「1：まったく当てはまらない」を「ネガティブな意識」とした。この3つのカテゴリー（「ポジティブな意識」、「ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識」、「ネガティブな意識」）ごとに内容の同質性にもとづいて分類し、人数を集計した。類似の内容が複数抽出された場合には、1つの意見に集約した（一方の意見を省略した）。ただし、ニュアンスに違いがみられた場合は個別のものとして扱った。さらに、記述内容について、表2と表3に示した意識の要因をもとに整理した。この意識の要因の整理は「ポジティブな意識」と「ネガティブな意識」の2つのカテゴリーで行った。

表2 ポジティブな意識の要因

意識の要因	記号
英語を学習する時期として適切であるなど「学習する時期」が考えられるもの	A
リスニング力、語彙力、コミュニケーション力などの力が身に付く、新しいものの見方ができるようになるなど「身に付く力」が考えられるもの	B
英語を好きになる、英語に興味をもつなど「英語に対する感情」が考えられるもの、また、楽しく学習できる、興味をもって学習できるなど「学習に対する感情」が考えられるもの	C
外国語の背景にある文化に対する理解が深まる、異文化について学習するなど「国際理解」が考えられるもの	D
これまでの学習（中学年の外国語活動）と円滑に接続できる、また、その後の学習（中学校の外国語科など）に円滑に接続できるなど「学習の接続」が考えられるもの	E
グローバル化が進む中で、英語を使う場面あり、そこで活用できるなど「将来、役に立つ」が考えられるもの	F
授業を参観したり、授業を実践したりする中で良いと思ったなど「教育現場の経験」が考えられるもの	G
経験を活かせる、資格をもっているなど「教員の経験や資格」が考えられるもの	H
英語が得意である、英語力がある、授業の実践力がある、授業ができる、授業をする自信があるなど「教員の指導力」が考えられるもの	I
「その他（A～I以外のもの）」が考えられるもの	J

表3 ネガティブな意識の要因

意識の要因	記号
英語を学習する時期として不適切であるなど「学習する時期」が考えられるもの	a
英語が得意でない、英語力がない、授業の実践力がない、授業ができない、授業をする自信がないなど「教員の指導力」が考えられるもの	b
教材の準備をする時間がない、多忙であるなど「教員のおかれている状況」が考えられるもの	c
「その他（a～c以外のもの）」が考えられるもの	d

4 結果と考察

4-1 選択肢法による調査

各質問項目において学部学生と若手教員の平均値、標準偏差を算出し、天井効果と床効果の有無について検討した。その結果を表4に示す。さらに、対応のないt検定を行った結果を表4に示す。

質問項目I「小学校高学年の外国語科は必要である。」については、学部学生と若手教員ともに、天井効果がみられた。つまり、学部学生と若手教員の意識は「良好」であったといえる。質問項目Iでt検定を行った結果、有意な差がみられなかった。このことから、両者を比較した場合、学部学生の意識と若手教員の意識に明瞭な得点差がみられなかったといえる。

質問項目II「小学校高学年の外国語科の授業をしたい。」については、学部学生には、天井効果がみられず、床効果もみられなかった。つまり、学部学生の意識は「良好」でもなく、「不良」でもなかったといえる。一方、若手教員には、床効果がみられた。つまり、若手教員の意識は「不良」であったといえる。質問項目IIでt検定を行った結果、有意な差がみられなかった。このことから、両者を比較した場合、学部学生の意識と若手教員の意識に明瞭な得点差がみられなかったといえる。

ただし、学部学生の意識と若手教員の意識に有意傾向はみられた ($p < 0.10$: 学部学生の平均値 > 若手教員の平均値)。

天井効果、床効果の有無をもとにすると、学部学生の意識と若手教員の意識は、異なるカテゴリーに分類されたことになる(学部学生の意識: 「良好」でもなく、「不良」でもないというカテゴリー: 「不良」であるというカテゴリー)。一方、t検定の結果をもとにすると、学部学生の意識と若手教員の意識に明瞭な得点差がみられなかったことになる。解釈に留意する必要があるが、t検定の結果、有意傾向がみられたことをもとに解釈すると上記のことを理解することができる。

表4 選択肢法による調査を分析した結果

番号	質問項目の内容	学部学生		若手教員		t検定の結果		
		平均値 (標準偏差)	効果	平均値 (標準偏差)	効果	df	t値	有意 確率
I	小学校高学年の外国語科は必要である。	4.21 (1.04)	●	4.08 (1.02)	●	62	0.51	n. s.
II	小学校高学年の外国語科の授業をしたい。	3.13 (1.36)	-	2.46 (1.53)	▲	62	1.84	n. s. (†)

●: 天井効果あり, ▲: 床効果あり, -, なし

n. s.: 非有意, †: $p < 0.10$, *: $p < 0.05$

4-2 記述法による質問項目Iの調査

(1) 質問項目Iの学部学生の記述

質問項目I「小学校高学年の外国語科は必要である。」の学部学生の記述内容を分類・集計した結果について以下に述べる(表5)。なお、表5に示したS1、S2といった学生の番号は表5の中で区別するために付けたものであり、他表の学生の番号と関連していない。

表5の「ポジティブな意識」について以下に述べる。

S1～S5のうち、S1、S2には「早い」、S3、S4には「子どもの頃」、S5には「小学生」という文言がみられる。これらの記述から、A「高学年の時期に英語を学習することを適切にとらえていること」を見取ることができる。

S2には「身につけやすい」という文言がみられる。この記述から、B「英語力が身に付くととらえていること」を併せて見取ることができる。

S5には「楽しんで学習できそう」という文言がみられる。この記述から、C「楽しく学習できるととらえていること」を併せて見取ることができる。

S6には「英語に触れる機会が多い方が」という文言がみられる。この記述には、上記と近いニュアンスがあると思われる。この記述から、A「高学年の時期に英語を学習することを適切にとらえていること」を見取ることができる。また、S6には「力が身につく」という文言がみられる。この記述から、B「英語力が身に付くととらえていること」を併せて見取ることができる。

S7には「英語に興味を持ってもらう」という文言がみられる。この記述から、C「興味をもつととらえていること」を見取ることができる。

S8～S20のうち、S8～S17には「中学校」、S18には「中学」、S19、S20には「スムーズな接続」という文言がみられる。これらの記述から、E「中学校に円滑に接続できるととらえていること」を見取ることができる。

S8には「英語嫌いをなくす」という文言がみられる。S9には「苦手感を持ってしまう」という文言がみられる。これらの記述から、C「英語に対する抵抗感を小さくできるととらえていること」を併せて見取ることができる。

S10には「外国語の知識を学ぶことが大切」という文言がみられる。この記述から、B「英語に対する知識を学習することが大切であるととらえていること」を併せて見取ることができる。

S13には「アルファベットと多少の単語を覚えておく」という文言がみられる。この記述から、B「アルファベットと英単語を学習できるととらえていること」を併せて見取ることができる。

S14には「学力が必要」という文言がみられる。この

記述から、B「英語力が身に付くととらえていること」を併せて見取ることができる。

S17には「以降」という文言がみられる。この記述から、E「中学校を含めて、その後の学習に円滑に接続できるととらえていること」を併せて見取ることができる。

S21には「異国の文化を知る」という文言がみられる。この記述から、D「異文化について学習できるととらえていること」を見取ることができる。また、S21には「道徳の授業にも生きてくる」という文言がみられる。この記述から、J「学習したことが、道徳科で活用できるととらえていること」を見取ることができる。

S22には「外国の方と交流できる機会の1つ」という文言がみられる。この記述から、J「外国の人と交流できるととらえていること」を見取ることができる。

S23には「コミュニケーション」、「楽しさ」という文言がみられる。この記述から、C「コミュニケーションをとる楽しさを学習できるととらえていること」を見取ることができる。なお、その楽しさを感じるために、前提としてコミュニケーション力が身に付くことが必要であれば、要因としてBが伴うと考えられる。

S24には「社会の変化に対応」、「グローバル化」という文言がみられる。S25は「グローバル化」、「外国語の必要性を感じる」という文言がみられる。S26には「英語が話せて便利」という文言がみられる。S27には「英語が主流になる」という文言がみられる。S28には「これからの社会でより英語が必要になる」という文言がみられる。これらの記述から、F「国際化が進む社会の中で将来、役に立つととらえていること」を見取ることができる。

S29には「これからの日本のためになる」という文言がみられる。この記述からはJ「将来、国のためになる(役に立つ)ととらえていること」を見取ることができる。

表5の「ネガティブな意識」について以下に述べる。

S33には「小学校の時期に別にしなくてもいい」という文言がみられる。この記述からはa「高学年の時期を含めて小学校で英語を学習する必要がないととらえていること」を見取ることができる。また、S33には「中学校でも最初は同じような内容をする」という文言がみられる。この記述からはd「高学年の外国語科の学習内容を中学校で再度、学習するととらえていること」を見取ることができる。

S34には「小学校の教員が英語を教えることは難しい」という文言がみられる。この記述から、b「教員が英語を教える力が十分でないにとらえていること」を見取ることができる。

表5 質問項目Ⅰの学部学生の記述内容を分類・集計した結果

分類	学生	記述内容	人数	
○	S1	早いうちから触れておくことは大切と思うから。	1	
	S2	早い段階から学ぶことで、身につけやすいと思うので。	1	
	S3, S4	子どもの頃から英語に慣れ親しんでおくことが必要であると感じるため。	2	
	S5	小学生のうちに学んでおく楽しんで学習できそう。	1	
	S6	英語に触れる機会が多い方が力が身につくと思うから。	1	
	S7	英語に興味を持ってもらうため。	1	
	S8	中学校入って英語の教科があるので、それに慣れるためと英語嫌いをなくすため。	1	
	S9	中学校でいきなり本格的に英語学び、苦手感を持ってしまいかもしれないから。	1	
	S10	中学校に入る前に、ある程度外国語の知識を学ぶことが大切だと思うから。	1	
	S11, S12	中学校への準備として必要だと思うから。	2	
	S13	英語につながる科目だから。アルファベットと多少の単語を覚えておく中学校の英語につながる。	1	
	S14	中学校に繋がる学力が必要だから。	1	
	S15	中学校の英語に継続した学びができるから。	1	
	S16	中学校でつまづかないようにするため。	1	
	S17	中学校以降の学習に役立ちそう。	1	
	S18	中学への基礎。	1	
	S19, S20	スムーズな接続に必要。	2	
	S21	異国の文化を知ることによって道徳の授業にも生きてくるから。	1	
	S22	外国の方と交流できる機会の1つになり得るから。	1	
	S23	異言語でコミュニケーションをとり、より多くの人と繋がる楽しさを知ってほしいから。	1	
	S24	社会の変化に対応できるように(グローバル化)。	1	
	S25	グローバル化が進み外国語の必要性を感じるから。	1	
	S26	英語が話せて便利と思うから。	1	
	S27	英語が主流になるから。	1	
	S28	これからの社会でより英語が必要になると考えるため。	1	
	S29	これからの日本のためになると思うから。	1	
	□	S30	中学英語につながるのかなと。	1
		S31	言語学習のタイミングは本人のモチベーションと継続だと思うのでいつでも良いと思う。しかし、小学校でやって語学が楽しい、価値があると思えるならやる意義は大きいと思う。	1
		S32	できるならやったほうが良いから。	1
△	S33	小学校の時期に別にしなくてもいいと思う。中学校でも最初は同じような内容をするから。	1	
	S34	小学校の教員が英語を教えることは難しいと思うから。	1	

○：ポジティブな意識，△：ネガティブな意識

□：ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識

(2) 質問項目Ⅰの若手教員の記述

質問項目Ⅰ「小学校高学年の外国語科は必要である。」の若手教員の記述内容を分類・集計した結果について以下に述べる(表6)。なお、表6に示したT1、T2といった教員の番号は表6の中で区別するために付けたものであり、他表の教員の番号と関連していない。

表6の「ポジティブな意識」について以下に述べる。

T1には「早い」という文言がみられる。T2には「早く」という文言がみられる。これらの記述から、A「高学年の時期に英語を学習することを適切ととらえていること」を見取ることができる。

T2には「発音など学んだほうが良い」という文言がみられる。この記述から、B「発音の学習ができるととらえていること」を併せて見取ることができる。

T3には「学ぶ必要性を高学年になると理解できる」という文言がみられる。この記述から、A「高学年の時

期に英語を学習することを適切ととらえていること」を見取ることができる。

T4には「中学年」、「つなぐ」という文言がみられる。この記述から、E「外国語活動と円滑に接続できるととらえていること」を見取ることができる。

T5～T13のうち、T5～T10には「中学校」、T11～T13には「中学」という文言がみられる。これらの記述から、E「中学校に円滑に接続できるととらえていること」を見取ることができる。

T9には「嫌いになりそう」という文言がみられる。T10には「英語への苦手意識をなくす」という文言がみられる。T11には「英語への抵抗感をなくす」という文言がみられる。これらの記述から、C「英語に対する抵抗感を小さくできるととらえていること」を併せて見取ることができる。

T13には「高校」という文言がみられる。この記述か

ら、E「中学校を含めて、高等学校の学習に円滑に接続できるととらえていること」を併せて見取ることができる。

T14には「外国人と話す機会が増えている」という文言がみられる。この記述から、J「外国の人と話す機会が増えているととらえていること」を見取ることができる。「将来、役に立つ」という意味であれば、要因としてFが考えられる。

T15には「コミュニケーション能力が高まる」という文言がみられる。この記述から、B「コミュニケーション力が身に付くととらえていること」を見取ることができる。また、T15には「将来必要」という文言がみられる。この記述から、F「将来、役に立つととらえていること」を見取ることができる。

T16には「外国語を身につける」という文言がみられる。この記述から、B「英語力が身に付くととらえていること」を見取ることができる。また、T16には「文化の違いに触れる」という文言がみられる。この記述から、D「異文化について学習できるととらえていること」を

見取ることができる。

T17には「日々子どもたちの成長を感じる」という文言がみられる。T18には「子供も楽しそうにしている」という文言がみられる。これらの記述から、G「授業を参観して、または、授業を実践して良いととらえていること」を見取ることができる。

T17には「基本的なコミュニケーション能力が身につく」という文言がみられる。この記述から、B「コミュニケーション力が身に付くととらえていること」を併せて見取ることができる。

表6の「ネガティブな意識」について以下に述べる。

T24には「高学年で学ぶことが多すぎる」という文言がみられる。この記述から、d「高学年のカリキュラムが密であり、外国語科を導入することに無理があるととらえていること」を見取ることができる。

T25には「フォニックスや文法を教えない」、「使いこなせない」という文言がみられる。この記述から、d「英語力が身に付くととらえていないこと」を見取ることができる。

表6 質問項目1の若手教員の記述内容を分類・集計した結果

分類	教員	記述内容	人数
○	T1	早いうちから、英語に親しませた方が良い。	1
	T2	早くから発音など学んだほうが良いため。	1
	T3	学ぶ必要性を高学年になると理解できると思うから。	1
	T4	中学年で学んだことをつなぐ。	1
	T5	中学校でいきなり英語にふれるよりよいから。	1
	T6	中学校の外国語の授業でのつまづきを少しでもなくせると良いと思うから。	1
	T7	中学校へのスモールステップとして必要であると思う。	1
	T8	中学校へのハードルを緩やかにするため。	1
	T9	中学校でいきなり始まると嫌いになりそうだから。	1
	T10	中学校英語への苦手意識をなくすため。	1
	T11	中学ギャップをなくし、英語への抵抗感をなくすため。	1
	T12	中学英語に繋ぐため。	1
	T13	中学、高校と英語が必要になるため、その基盤づくりとして必要であるとする。	1
	T14	外国人と話す機会が増えているため。	1
	T15	コミュニケーション能力が高まる。将来必要。	1
	T16	外国語を身につけるという観点以外に文化の違いに触れるという意味を持っており、グローバル化が進む現在では、そのような違いについて十分に考える必要があるから。	1
	T17	日々子どもたちの成長を感じる。なによりも話すことを大切にしているので、基本的なコミュニケーション能力が身につく。	1
	T18	子供も楽しそうにしているから。	1
□	T19	中学校以降にむけて、英語を学ぶ楽しさを味わうことは必要だと思う。	1
	T20	外国語活動は必要だと思うが、言語に特化する必要はないと思うから。	1
	T21	意義は感じるが、本格的に勉強しても身につくのかどうかまだ未開なため。	1
	T22	外国語科として文法や構文等を学習することが、他の学習や活動を圧迫することで、小学校での様々な学びが「浅く広く」になってしまわないかと感じるがあるから。	1
	T23	文法を習わないのに過去形が出てきて教え方が難しいと6年生の先生がいていたから。	1
△	T24	高学年で学ぶことが多すぎる。	1
	T25	フォニックスや文法を教えないので、キーセンテンスや単語の数を増やしても児童は使いこなせない。	1

○：ポジティブな意識，△：ネガティブな意識

□：ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識

(3) 質問項目Ⅰの学部学生と若手教員の記述の比較

質問項目Ⅰ「小学校高学年の外国語科は必要である。」の学部学生と若手教員の記述内容を分類した結果を比較した(表7)。なお、表7のうち、その他の要因(J, d)については除いて検討した。

表7をみると、学部学生と若手教員では、ポジティブな意識の要因の有無の表出の仕方は9つの要因(A~I)のうち、8つの要因(A~F, H, I)で一致していたが、1つの要因(G)で一致していなかった。一方、ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因(a~c)のうち、1つの要因(c)で一致していたが、2つの要因(a, b)で一致していなかった。

な意識の要因の有無の表出の仕方は9つの要因(A~I)のうち、8つの要因(A~F, H, I)で一致していたが、1つの要因(G)で一致していなかった。一方、ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因(a~c)のうち、1つの要因(c)で一致していたが、2つの要因(a, b)で一致していなかった。

表7 質問項目Ⅰ「小学校高学年の外国語科は必要である。」の記述内容を分類した結果の比較

調査対象者	ポジティブな意識の要因										ネガティブな意識の要因			
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	a	b	c	d
学部学生	●	●	●	●	●	●	-	-	-	●	●	●	-	●
若手教員	●	●	●	●	●	●	●	-	-	-	-	-	-	●

記号：表2と表3を参照

●：あり， -：なし

4-3 記述法による質問項目Ⅱの調査

(1) 質問項目Ⅱの学部学生の記述

質問項目Ⅱ「小学校高学年の外国語科の授業をしたい。」の学部学生の記述内容を分類・集計した結果について以下に述べる(表8)。なお、表8に示したS1、S2といった学生の番号は表8の中で区別するために付けたものであり、他表の学生の番号と関連していない。

表8の「ポジティブな意識」について以下に述べる。

S1~S8のうち、S1、S2には「楽しそう」、S3には「楽しく」、S4~S6には「楽しさ」、S7には「楽しい」、S8には「楽しめる」という文言がみられる。これらの記述から、または、C「楽しく学習できるととらえていること」、C「楽しい授業をしたいととらえていること」を見取ることができる。

S2には「自分の経験も話せる」という文言がみられる。この記述から、H「自分の経験を活かせる」ととらえていること」を併せて見取ることができる。

S6には「英語が好き」という文言がみられる。この記述から、I「学生が、英語が好きであること」を併せて見取ることができる。

S7には「どの教科でも学びは楽しい」という文言がみられる。この記述から、J「外国語科だけでなく、その他の教科においても学習することは楽しい」ととらえていること」を併せて見取ることができる。

S8には「ゲームなどを活用する」という文言がみられる。この記述から、J「ゲームを通して学習できるととらえていること」を併せて見取ることができる。

S9には「外国語に興味を持ってもらいたい」という文言がみられる。この記述から、C「英語に興味をもたせたい」ととらえていること」を見取ることができる。

S10には「苦手意識を持たせないようにしたい」という文言がみられる。この記述から、C「英語に対する抵抗感をなくしたい」ととらえていること」を見取ることができる。

S11には「中学」、「土作りがしたい」という文言がみられる。この記述から、E「中学校に円滑に接続したい」ととらえていること」を見取ることができる。また、S11には「以降」という文言がみられる。この記述から、E「中学校を含めて、その後の学習に円滑に接続したい」ととらえていること」を併せて見取ることができる。

S12には「国際理解も入れたい」という文言がみられる。この記述から、D「国際理解に関する学習をしたい」ととらえていること」を見取ることができる。

S13には「海外の人と交流できる場を増やしたい」という文言がみられる。この記述から、J「外国の人と交流させたい」ととらえていること」を見取ることができる。

S14には「これからの社会では英語は必須」という文言がみられる。この記述から、F「将来、役に立つ」ととらえていること」を見取ることができる。

S15には「わたし自身の勉強にもなる」という文言がみられる。この記述から、J「教員にとって学びになるととらえていること」を見取ることができる。

S16には「専科教師に興味がある」という文言がみられる。この記述から、J「外国語科の専科教員に興味をもっていること」を見取ることができる。

表8の「ネガティブな意識」について以下に述べる。

S24~S27には「自分の英語力に自信がない」という文言がみられる。S28、S29には「自分の英語力が低く、教える自信がない」という文言がみられる。S30には「英語が苦手」という文言がみられる。S31には「教えられるほど喋れない」という文言がみられる。これらの記述から、b「自分の英語力が不足している」ととらえていること」、を見取ることができる。

S32には「日本語でクラスをまとめるのも難しい」という文言がみられる。この記述から、b「自分の英語力が不足している」ととらえていること」を見取ることができる。また、b「その他の力(学級をまとめる力など)

も不足している」とらえていること」を見取ることができる。

S33には「外国語が得意な先生にやっていただきたい」という文言がみられる。この記述から、b「英語が得意な教員に授業を担当してほしい」とらえているこ

と」を見取ることができる。

S34には「小学校で英語を学ぶ必要を感じていない」という文言がみられる。この記述から、a「高学年の時期を含めて小学校で英語を学習する必要がない」とらえていること」を見取ることができる。

表8 質問項目IIの学部学生の記述内容を分類・集計した結果

分類	学生	記述内容	人数
○	S1	楽しそうだから。	1
	S2	楽しそうだし、自分の経験も話せるから。	1
	S3	楽しく英語に親しんでほしいから。	1
	S4, S5	外国語科の楽しさを伝えたいから。	1
	S6	英語が好きでその楽しさを伝えられるといいと思うから。	1
	S7	どの教科でも学びは楽しい。	1
	S8	英語に対して苦手意識のある児童もいるかもしれないが、ゲームなどを活用すると、まだ全体で楽しめると思う。	1
	S9	外国語に興味を持ってもらいたい。	1
	S10	英語が苦手な子どもも苦手意識を持たせないようにしたいから。	1
	S11	中学以降の英語で苦労しない土台作りがしたい。	1
	S12	その中に国際理解も入れたい。	1
	S13	実際に海外の人と交流できる場面を増やしたい。	1
	S14	これからの社会では英語は必須である。	2
	S15	わたし自身の勉強にもなる。	1
	S16	専科教師に興味があるから。	1
	□	S17	何とか授業できそうだから。
S18		必要だからするイメージ。	1
S19		積極的にしたいとは思わないが、別にやりたくないわけでもないから。	1
S20		特別したいわけではないが、やらないといけないから仕方ない。	1
S21		中学年よりも少し本格的になるので自分に指導できるか少し不安だから。	1
S22		授業はしてみたいが基礎基本がなっていない可能性があるから。	1
S23		自分の発音にあまり自信がないから。	1
△	S24-S27	自分の英語力に自信がないから。	4
	S28, S29	自分の英語力が低く、教える自信がないから。	2
	S30	英語が苦手だから。	1
	S31	教えられるほど喋れないから。	1
	S32	日本語でクラスをまとめるのも難しいくらいなので。	1
	S33	外国語が得意な先生にやっていただきたい。発音など、上手な先生が教えた方がよい。	1
	S34	小学校で英語を学ぶ必要を感じていないから。	1

○：ポジティブな意識，△：ネガティブな意識

□：ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識

(2) 質問項目IIの若手教員の記述

質問項目II「小学校高学年の外国語科の授業をした。」の若手教員の記述内容を分類・集計した結果について以下に述べる(表9)。なお、表9に示したT1、T2といった教員の番号は表9の中で区別するために付けたものであり、他表の教員の番号と関連していない。

表9の「ポジティブな意識」について以下に述べる。

T1~T4のうち、T1、T2には「楽しく」、T3には「楽しめる」、T4には「楽しみながら」という文言がみられる。これらの記述から、C「楽しく学習できるとらえていること」、または、C「楽しい授業をしたい」とらえていること」を見取ることができる。

T2には「チャッツなどを取り入れて」という文言がみられる。この記述から、J「チャッツを使って学習できるとらえていること」を併せて見取ることができる。

T3には「苦手にならないように」という文言がみられる。この記述から、C「英語に対する抵抗感をなくしたい」とらえていること」を併せて見取ることができる。また、T3には「授業を考えていきたい」という文言がみられる。この記述から、J「授業の工夫改善について興味があること」を併せて見取ることができる。

T4には「技能も高められるような」という文言がみられる。この記述から、J「英語力を身に付けさせたい」とらえていること」を併せて見取ることができる。また、T4には「授業づくりについて興味がある」という文言がみられる。この記述から、J「授業の工夫改善について興味があること」を併せて見取ることができる。

T5には「今授業をしていて」という文言がみられる。T6には「今授業をしている」という文言がみられる。これらの記述から、G「授業を実践して良い」とらえて

いること」を見取ることができる。なお、T5、T6には「楽しい」という文言がみられるが、「楽しい」の主語は教員である。

T7、T8には「中学」という文言がみられる。この記述から、E「中学校に円滑に接続したい」とらえていることを見取ることができる。

T7には「話す、書くなど英語の基礎的なことを身につけさせたい」という文言がみられる。この記述から、J「話す、書くといった英語力を身に付けさせたい」とらえていることを見取ることができる。

表9の「ネガティブな意識」について以下に述べる。

T11～T15には「自信がない」という文言がみられる。T16、T17には「苦手意識がある」という文言がみられる。T18、T19には「英語が苦手」という文言がみられる。T20には「不安がある」という文言がみられる。T21には「教えるレベルにない」という文言がみられる。

T22には「自分の英語力では授業をするのが難しそう」という文言がみられる。これらの記述から、b「自分の英語力が不足している」とらえていることを見取ることができる。

T23には「教材研究が大変そう」という文言がみられる。この記述から、c「教材研究に時間がかかるとらえていること」を見取ることができる。

T24には「その後の協議が大変そう」という文言がみられる。この記述から、c「打ち合わせに時間がかかるとらえていること」を見取ることができる。

T25には「空き時間」、「2時間は他の業務に」という文言がみられる。T26には「空き時間」、「他の業務をしたい」という文言がみられる。これらの記述から、c「外国語科を担当すると空き時間が少なくなるとらえていること」を見取ることができる。

表9 質問項目IIの若手教員の記述内容を分類・集計した結果

分類	教員	記述内容	人数
○	T1	楽しく学習できると思うから。	1
	T2	学習内容はハードルが高くなってきているが、チャンツなど取り入れて、楽しく感じながら学べるから。	1
	T3	苦手にならないように楽しめる授業を考えていきたいから。	1
	T4	児童が楽しみながら技能も高められるような授業づくりに興味があるから。	1
	T5	今授業をしていて、私自身とても楽しいから。	1
	T6	今授業をしているが、子どもと英語で会話をしたり、授業をつくったりすることを楽しいと感じている。	1
	T7	中学の英語で苦戦しないように話す、書くなど英語の基礎的なことを身につけさせたいから。	1
	T8	安心して中学にあげたい。	1
□	T9	英語の授業はしたいが、空きコマが欲しいから。	1
	T10	外国語活動同様、授業として準備ができる点はよいが、文法や構文等の内容について指導する自信はないから。	1
△	T11	話せる自信がない。	1
	T12	書くことや文法など自信がない。	1
	T13	文法などが入ってきて教えられる自信がないから。	1
	T14, T15	英語を教える自信がないから。	2
	T16, T17	英語に苦手意識があるから。	2
	T18, T19	英語が苦手だから。	2
	T20	自分の発音では、不安がある。	1
	T21	英語を教えるレベルにないと思うから。	1
	T22	自分の英語力では授業をするのが難しそうだから。	1
	T23	教材研究が大変そうだから。	1
T24	その後の協議が大変そうだから。	1	
T25	週8時間の空き時間のうち、2時間は他の業務に。	1	
T26	空き時間は貴重。できることなら他の業務をしたい。	1	

○：ポジティブな意識，△：ネガティブな意識

□：ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識

(3) 質問項目IIの学部学生と若手教員の記述の比較

質問項目II「小学校高学年の外国語科の授業をした。」の学部学生と若手教員の記述内容を分類した結果を比較した(表10)。なお、表10のうち、その他の要因(J, d)については除いて検討した。

表10をみると、学部学生と若手教員では、ポジティブ

な意識の要因の有無の表出の仕方は9つの要因(A～I)のうち、4つの要因(A～C, E)で一致していたが、5つの要因(D, F～I)で一致していなかった。一方、ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因(a～c)のうち、1つの要因(b)で一致していたが、2つの要因(a, c)で一致していなかった。

表10 質問項目II「小学校高学年の外国語科の授業をしたい。」の記述内容を分類した結果の比較

調査対象者	ポジティブな意識の要因										ネガティブな意識の要因			
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	a	b	c	d
学部学生	-	-	●	●	●	●	-	●	●	●	●	●	-	-
若手教員	-	-	●	-	●	-	●	-	-	●	-	●	●	-

記号：表2と表3を参照

●：あり， -：なし

5 おわりに

本研究では、高学年の外国語科に対する教育学部の学部学生及び小学校の若手教員の意識を調査し、両者を比較した。質問紙で設定した質問項目は、質問項目I「小学校高学年の外国語科は必要である。」と質問項目II「小学校高学年の外国語科の授業をしたい。」であった。選択枝法による調査を分析した結果、以下のことが明らかになった。

質問項目I「小学校高学年の外国語科は必要である。」について、学部学生と若手教員の意識は「良好」であった。両者を比較したところ、意識に明瞭な得点差がみられなかった。

質問項目II「小学校高学年の外国語科の授業をしたい。」について、学部学生の意識は「良好」でもなく、「不良」でもなかった。一方、若手教員の意識は「不良」であった。両者を比較したところ、意識に明瞭な得点差がみられなかったといえる。学部学生の意識と若手教員の意識が異なるカテゴリーに分類されたにもかかわらず、両者に明瞭な得点差がみられなかった。このことについては、解釈に留意する必要があるが、前述したようにt検定の結果、有意傾向がみられたことをもとに解釈すると理解することができる。

記述法による調査を分析の結果、以下のことが明らかになった。

質問項目I「小学校高学年の外国語科は必要である。」について、学部学生と若手教員で、意識の要因の有無の表出の仕方を比較したところ、ポジティブな意識の要因の有無の表出の仕方は9つの要因のうち、8つの要因で一致していたが、1つの要因で一致していなかった。一方、ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因のうち、1つの要因で一致していたが、2つの要因で一致していなかった。

質問項目II「小学校高学年の外国語科の授業をしたい。」について、学部学生と若手教員で、意識の要因の有無の表出の仕方を比較したところ、ポジティブな意識の要因の有無の表出の仕方は9つの要因のうち、4つの要因で一致していたが、5つの要因で一致していなかった。一方、ネガティブな意識の要因の有無の表出の仕方は3つの要因のうち、1つの要因で一致していたが、2つの要因で一致していなかった。

上記のように、本研究を通して、高学年の外国語科に対する学部学生及び若手教員の意識が明らかになった。

本研究、また、佐伯・中田（2022）において、調査・分析したのは、教育学部の学部学生（3年生と4年生）及び小学校の若手教員（1年目と2年目の教員）の意識であった。勤務経験が3年以上の教員の意識については調査・分析しておらず、不明である。今後、勤務経験が3年以上の教員の意識についても調査・分析し、明らかにする必要がある。

文献

佐伯英人・中田青空（2022）「小学校の外国語活動に対する大学生と若手教員の意識－小学校総合選修の在校生と卒業生を比較して－」、『山口大学教育学部研究論叢』，第71巻，pp.149-158
 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）』，東洋館出版社。